第35回　岡倉天心記念　がん哲学外来　巣鴨カフェ「桜」

令和4年　5月14日（土）

言葉の処方箋　　いい覚悟で生きる　樋野　興夫　P69

人生は不連続の連続である

人生は階段状の道を進んでいるようなもの。その途中で、 まるで身長が伸びたように感じる転機があるものです。

私は、アメリカのアインシュタイン医科大学肝臓研究センターに続き、30 代 になってからフォックスチェイスがんセンターに留学しました。正直なところ、 積極的な留学ではなく、当時、私が属していた癌研究所からの指示でしたが、 そのとき送り出してくれた恩師の菅野晴夫先生はこう言ったのです。

「紙と鉛筆でサイエンスがどこまでできるか学んでこい」

最初はその意味するところが、私にはよくわかりませんでした。

私が専門とする病理学というのは、顕微鏡でがんを目視して、手でさわって、 頭の中で DNA を構築して、その解析をするのが仕事です。医学の中ではいちばん要の分野と言ってもいいでしょうが、紙と鉛筆だけでできるものではありません。

しかし、アメリカで学び、多くの論文を読み、 フォックスチェイスがんセンターに勤務されていたがん遺伝学の父と言われるアルフレッド・クヌッドソン博士との出会いによって、その言葉の意味するところがわかってきました。

科学的データの解析に止どまらず、大局観と想像力を持ってサイエンスをとらえることで、試験管の中に見える世界から、より広い視野で世界を見て、真理とは何かを見る目を養うことができたからです。日本にいるときは井の中の蛙のようだった私の、進むべき基軸がはっきりしたのです。

クヌッドソン博士は、分子生物学が脚光を浴びていた時代から逆行するように、遺伝性がんのメカニズムを解析し多大な業績を上げた人です。 がんの最初に何が起きているかを追求し、がんは細胞内の DNA の突然変異が積み重なった結果できることを解明、発がんの理論やがんを抑える遺伝子（がん抑制遺伝子）の存在も予測しました

現在では、約 100 種類のがん抑制遺伝子がわかっており、この分野の研究が進めば、がん細胞だけを狙って治療する薬剤や、放射線治療法などの開発にも役立つとされています。

私は帰国後、実験病理学と診断病理学の橋渡しをすることになります。この両者を合わせて「広々とした病理学」と命名した菅野先生から特訓を受け、ぶれぬ大局観を持ったがん学を教わりました。

そのとき、私は自分の身長が急に伸びた気がしました。もちろん物理的に伸びたわけではなく、人間として大きく成長したという意味です。

この体験を踏まえて私は言うのです。 人生には大きな出会いや出来事を体験することで、精神的に大きく成長するときがあります。 身長がぐっと伸びると視界まで変わって世の中が見えるような感覚です。 この体験を人生の不連続点としましょう。 人生はいくつもの不連続点という階段を上るように通過しながら歩いていくものだと思います。ときにはステップで立ち止まり、ときにはしっかり１段上がる。つまり、不連続の連続です。

それはまた、がんになった人でも例外ではありません。

がんになるという大きな体験を人生の不連続点と考えてほしいのです。 闘病はマイナスな状況と甘んじることなく、自分という人間を鍛えるチャンスと思ってほしい。 身長をぐっと伸ばす機会を逃さないでほしいのです。 がんは人間としての成長促進剤と考えてみてはどうでしょう。

がんになることで学ぶものは人間学です。自由にならない体や時間、人間関係を受けとめたとき、そこから謙虚さを学び、心を開いて周囲の人とつながりを持ち、なんのために生まれてきたのかという人生の役割を考える。すると、風貌が変わると私は思います。 おだやかでほほえみさえ浮かぶ表情になる。視界が変わっていきます。そういう人は、周囲の尊敬を得て人生が開けていくのではないでしょうか。

がん哲学外来カフェで会ったある男性は、私の「人生は不連続の連続」という言葉を聞いたあとで言いました。

「私はがんになってから身長が伸びたと思います。 当初は苦しい、いやだ、仕方ない、なんでおればかりが不幸なんだ、といったマイナスのことしか考えられませんでした。でも、こうしてがん哲学外来カフェに来て、 些細な喜びを見出せるようになり、また先人のいろいろな本を読み、人間として強くなりました。私も先生と同じように身長が伸びました」人生何がいいことかわかりません。そのときは苦しかったとしても、 時がたったときにもしかするとこの不連続点のためだったのかもしれない、と思えたとしたら、 その人間力はたいしたものです。

この患者さんは、 自分では希望のない状況にあると思ったとしても、 深い学びの時が与えられていることに気づきました。 そして、 自ら人生のステップを１段上ったのです。